

地域おこし研究員 まっつらいくる 松浦生が行くる

1. 子どもたちと大学生の関わり
地域おこし研究員として活動をはじめ、早2年が経ちました。

主な活動の1つは「だいでん週末住人」制度という、大学生が余暇時間を使って、地域で役割を持ちながら、自身の興味関心を探求し、地域との関わりを深めるサポートをする仕組みづくりです。コロナ対策に気をつけながら、鳥取大学地域学部5名、公立鳥取環境大学2名の計7名が活動しました。大山町に関わり続けたいと考える「週末住人」は、第1期のメンバーも合わせると17人になりました。

メンバーは「小学校の先生になって、その地域ならではの教育を実践したい」「集落の豊かなつながりに興味がある」「農業と教育をからめたプログラムをつくってみたい」な

ど、各々のテーマを持って、活動の幅を広げています。

特に春休みには、地域自主組織などからお声がけいただき、子どもたちが集まる場に入ること、大学生と子どもたちの関わりがいくつも生まれました。

大山町は町内に高校がなく、さらに大学進学となると、ほとんどが県外に旅立ってしまいます。リアルな大学生という存在に出会ったことないまま、大学進学をしてしまうという声も聞きます。そんな町内の子どもたちにとって、大学生と出会うことは、将来を考えていく一つのきっかけになるのではないかと感じています。



▲子どもたちと将来の夢についておはなし中の宮脇ちひろさん（鳥大1年）

もちろん、「週末住人」制度の仕組みを持続的なものにするためには、乗り越えなければならぬ壁もたくさんあります。メンバーには、地域の課題解決につながるような活動を、より主体的に行ってもらえるように、地域の「関わりしろ」をもっと見つけていきたいと思っています。

2. 仕組みづくりのための「研究」

2年間、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程に在籍し「つながりの力」を様々な分野の課題解決に生かす仕組みづくりについて学んできました。今年度からは、慶應義塾大学SFC研究所の上席所員として、引き続き研究の世界にも身を置きます。

統計的な情報はもちろんのこと、それだけでは見えてこない当事者のリアルな声をデータとして扱い、行政や民間が単独では手を出しにくい「痒いところ」にアプローチしていくような、地に足のついた、かつ未来志向の仕組みづくりを進めていくお手伝いをしていきたいと思っています。



▲コラボレーションオフィス TORICO（富長159-1）も活動拠点です！

具体的には、「スキマ時間で稼ごうたい働き手×繁忙期の人手不足を課題とする農家のマッチング」や「みんなが知りたい情報にアクセスできるための町の情報発信」「都市部の複業人材のスキルやノウハウを、地域の課題解決に活かすプラットフォーム」などの仕組みづくりに携わっていきます。

地域のみなさんの率直な声をたくさんお聞きできたらと思っていますので、よろしくお願いたします。

問 企画課

☎0859-54-5202